定例バスハイキング
歌　集

芝ハイキングクラブ

坊がつる讃歌

1. 人みな花に　酔うときも
残雪　恋し　山に入り
涙をながす　山男
雪解の水に　春を知る

2. ミヤマキリシマ　咲き誇り
山くれないに　大船の
峰を仰ぎて　山男
花の情を知る者ぞ

3. 四面山なる坊がつる
夏はキャンプの　火を囲み
夜空を仰ぐ　山男
無我を悟るはこの時ぞ

4. 出湯の窓に　夜霧来て
せせらぎに寝る　山宿に
一夜を憩う山男
星を仰ぎて　明日を待つ

むかし　むかし

(1) むかしむかし　あるところに
登山者という　変な人種があったとさ
夏になると　テントしょって
わざわざ淋しい山に登って　喜んだ

(2) それに足りず　冬になると
スキーにワカン　アイゼンまで付け山の中
自分の住む国の中の　山では足りずに
ヒマラヤまでもと　押し出した

(3) そんな馬鹿な人種は今
地球の上には　居ないと利口な人が言う
そうでしょうか？　本当でしょうか？
それでは一体　僕の前を歩いている
人は何でしょうか？

新人哀歌

1. いいぞいいぞと　おだてられ
死に物狂いで　来てみれば
朝から晩まで　飯たきで
景色なんぞは　夢のうち

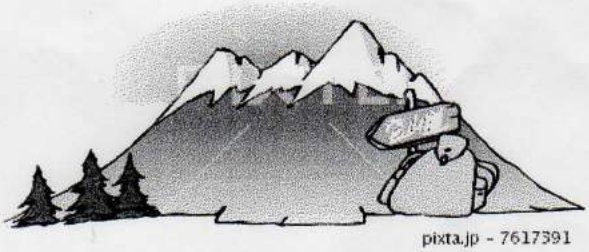
2. チーフリーダーは　爺くさい
サブリーダーは　婆くさい
あとのメンバーは　エロくさい
メッチェン通れば　頭右

3. 二年部員は　小生意気
先輩なにかと　話好き
地獄の二丁目　山岳部
好んではいる　馬鹿もいる

4. 蝶よ花よと　育てられ
何の苦労も　知らないで
ボッカ稼業に　身をやつし
泣き泣き登る　雪の山

5. 家へ帰ればお坊っちゃま
山へはいれば　新部員
何の因果でしごかれる
まぶたに浮かぶ　母の顔

6. いわゆるアノコはお嬢さま
おれはしがない　山がらす
月を眺めてあきらめる
笑ってくれるな　お月様



山賊の歌

(1) 雨が降れば　小川ができ
　風が吹けば　山ができる
　　ヤッホ　ヤッホホホ　淋しいところ
　　ヤッホ　ヤッホホホ　淋しいところ

(2) 夜になれば　空には星
　月が出れば　おいらの世界
　　ヤッホ　ヤッホホホ　みんなを呼べ
　　ヤッホ　ヤッホホホ　みんなを呼べ

(3) 肩をくんだら　明かりをつけろ
　眠いカラスは　起こすじゃないぞ
　　ヤッホ　ヤッホホホ　夜明けはまだだ
　　ヤッホ　ヤッホホホ　夜明けはまだだ

(4) 嵐が吹けば　波が立ち
　波が立てば　舟は沈む
　　ウッシ　ウッシシ　人のものは
　　ウッシ　ウッシシシ　おいらのものさ
　　おしまい

なため

(1) 森深く　迷い辿(たど)れば
　古き鉈目は　導きぬ
　人の心の　しみじみと
　懐かし嬉し　木暗(こぐら)き径(みち)に

(2) 岨(そば)茨(いばら)　いかにありとも
　努め拓きて　共々(ともども)に
　愛の導(しるべ)を　刻みつつ
　仰ぎて行かん　真白き峰を

北岳の歌

1) 思い遥かな　北岳の
　憩いの峰に　集いたる
　我等が友よ　高らかに
　いざや唱わんリードハイマート

2) あの山あの谷　あのフェース
　若い血潮の　高鳴りに
　固く握りし　ジッヘルの
　ザイルに託すリード・ハイマート

3) 吹雪に暮れたる　日も過ぎて
　仰ぐ青さよ　我が心
　今ぞ目指すは　バットレス
　鳴れよハーケン　リード・ハイマート

ひとりの山

1. 山に憧れ　山に行き
　言葉少なに　唯歩む

2. 雪渓滑りて　岩場を登りゃ
　ふれる岩肌の　冷たさよ

3. 恋に破れて　夢も破れ
　夕日静かに　山に沈む

4. ひとり寂しく　佇ずめば
　タバコの煙　唯ひとすじ

エーデルワイスの歌

1. 雪は消えねど　春はきざしぬ
風はなごみて　陽はあたたかし
氷河のほとりを　すべりて行けば
いわかげにさく
　アルペンブルーメ
紫におう　みやこをあとに
山にあこがれ若人のむれ

2. エーデルワイスの花ほゝえみて
するどき岩角こんじきにてり
山はめざめぬ夏の朝風
らんうんおさまりタ空はれぬ
生命のザイルにわがみをたくし
思わずあおぐ
　アルペングリユーエン

穂高よさらば

1. 穂高よさらば又くる日まで
奥穂にはゆるあかね雲
かえり見すれば　遠ざかる
まぶたにのこる　ジャンダルム

2. 滝谷さらば又くる日まで
北穂へつづく雪の道
かえり見すれは　遠ざかる
まぶたにのこる　槍ヶ岳

3. 涸沢さらば又くる日まで
横尾へつづく雪の道
かえり見すれば　遠ざかる
まぶたにのこる　びょうぶ岩

4. 岳沢さらば又くる日まで
前穂をあとに河童橋
かえり見すれば　遠ざかる
まぶたにのこる　畳岩

谷川小唄

1. 夜の上野の　プラットホーム
　　可愛いあの娘が　涙でとめる
とめてとまらぬ　俺らの心
　　山の男は　度胸だめし
　　トコズンドコ　ズンドコ
2. 泣いちゃいけない　笑顔におなり
　　たかがしばしの　別れじゃないか
可愛いお前の　泣き顔見れば
　　ザイルさばきの　手がにぶる
　　トコズンドコ　ズンドコ
3. いきなチロルよ　ザイルを肩に
　　行くぞ谷川　ちょいと一ノ倉
仰ぐ岩壁　朝日に映えて
　　今日はコップか　滝沢か
　　トコズンドコ　ズンドコ

4. 行こうか戻ろか　南稜テラス
　　戻りゃ俺らの　心がすたる
行けばあの娘が　涙を流す
　　山の男は　つらいもの
　　トコズンドコ　ズンドコ.
5. 歌うハーケン　伸びろよザイル
　　何のチムニー　オーバーハング
軽く乗っ越し　目の下見れば
　　雲が流れる　本谷へ
　　トコズンドコ　ズンドコ
6. 急な草付き　慎重に越せば
　　やっと飛び出る　国境稜線
固い握手に　心も霧も
　　晴れて見えるは　オキノ耳
　　トコズンドコ　ズンドコ
7. 右に西黒　左にマチガ
　　中に一筋　西黒尾根を
今日の凱歌に　足どり軽く
　　かけりゃ土合も　はや真近
　　トコズンドコ　ズンドコ
8. さらば上越　湯檜曽の流れ
　　さらば土合よ　谷川岳よ
またの来る日を　心に誓い
　　たどる列車の　窓の夢
　　トコズンドコ　ズンドコ

ふるさと

1)うさぎ追いし　かの山
小鮒(コブナ)釣りし　かの川
夢は今も　めぐりて
忘れがたき　故郷(フルサト)

2) いかにいます　父母
恙(ツツガ)なしや　友がき
雨に風に　つけても
思いいずる　故郷

(3) こころざしを　果たして
いつの日にか　帰らん
山はあおき　故郷
水は清き　故郷

アルプの歌

1. 嬉しい歌　悲しい歌
沢山聞いた中で
※忘れられぬ一つの歌
それはアルプの歌
(※くり返し)
2. 雨の中で風の中で
元気づけてくれる
力強く男らしい
それはアルプの歌
(※くり返し)
3. 谷を渡り尾根を越えて
遠くこだまする夜
今も胸によみがえる歌
それはアルプの歌
(※くり返し)
4. 苦しい時　疲れた時
空行く雲　眺めて
声高らかに友よ歌わん
それはアルプの歌

タンポポの歌

1)雪の下の　ふるさとの夜
冷たい風と　土の中で
青い～～空を～～　夢に見ながら
野原に咲いた　花だから

どんな花より　たんぽぽの　花をあなたに贈りましょう　どんな花より　たんぽぽの　花をあなたに贈りましょう)

2)高い工場(コウバ)の　壁の下で
どれだけ春を　待つのでしょう
数えた～～～指を～～　やさしく開き
空き地に咲いた　花だから

(　　繰り返し　　)

3)ガラスの部屋の　バラの花より
嵐の空を　見詰め続ける
あなたの～～～～胸の～～　想いのように
心に咲いた　花だから

(　　繰り返し　　)

二人の山男

1. そんなに急ぐと山が逃げるよ
ゆっくり行こう　ゆっくり行こう
あせらずに行こう
あせらずに行こう
口笛吹いて汗をぬぐえば
くすんだヒュッテの赤い屋根
見なれた道さ　道さ
急ぐこたないさ　ないさ

2. そんなに急ぐと山が逃げるよ
がっちり行こう　がっちり行こう
あせらずに行こう
あせらずに行こう
男が二人泣言云えば
山の女神もそっぽ向く
見なれた空さ　空さ
急ぐこたないさ　ないさ

山への祈り

1. 雪のはだにそっと　耳をあてれば
美しい歌が　きこえてくる
山の胸にねむる　いのちの声か

2. 雪の中の谷間　岩のほとりに
つつましくゆれる　白い花
山の胸にねむる　いのちの姿

3. 雪もとけて山に　春がめぐれば
ひとすじの煙　立ちのぼるよ
山に別れを告げる
いのちのこころ

信濃恋唄

1. 俺の思いはヨ　穂高の山々ヨ
はやる心はヨ　針の木五竜だヨ

2. いつかふたりでヨ　峰々越えてヨ
語り合うのはヨ　ふたりの幸をばだヨ

3. 白馬降りればヨ　レンゲが見えるヨ
思い出すのはヨ　あの娘のえくぼだヨ

山の子の歌

歌声が　歌声が　あの小径にひびけば
あの森かげ　あの谷間　山びこの歌
山の子は　山の子は　歌が好きだよ

雨にぬれ　雨にぬれ　てるてる坊主が泣いても
私たちは　泣かないで　山をみつめる
山の子は　山の子は　みんなつよいよ

雲が去り　雲が去り　青いみ空がみられりゃうたいましょう　山鳩　兄と妹
山の子は　山の子は　みんな仲良し

岳人の歌

1. 星がふるあのコールグリセードで
あの人はくるかしら花をくわえて
アルプスの恋唄
心ときめくよ　なつかしの岳人
やさしかのきみ

2. 白樺にもたれるは
いとしおとめか
あの黒百合の花を胸にいだいて
アルプスの黒百合
心ときめくよ　なつかしの岳人
やさしかのきみ

静かな湖畔

1. 静かな湖畔の　森のかげから
もう起きちゃいかがと　かっこうが鳴く
カッコウ　カッコウ
カッコウ　カッコウ　カッコウ

2. 夜もふけたよ　おしゃべりやめて
お休みなさいと　鳴くふくろう
ホッホウ　ホッホウ
ホッホウ　ホッホウ　ホッホウ

夏の思い出

1 夏がくれば　思い出す　遥かな尾瀬　遠い空
霧の中に　浮かびくる　やさしい影　野のこ道
水芭蕉の花が　咲いている
夢見て咲いている　水のほとり
石楠花色にたそがれる　遥かな尾瀬　遠い空

2 夏がくれば　思い出す　遥かな尾瀬　野の旅よ
水の中に　そよそよと　ゆれるゆれる　浮島よ
水芭蕉の花が　匂っている
夢見て匂っている　水のほとり
まなこつぶれば懐かしい　遥かな尾瀬　遠い空

学生時代

1．つたのからまるチャペルで　祈りを捧げた日
夢多かりしあのころの　思い出をたどれば
なつかしい友の顔が　ひとりひとり浮かぶ
重いカバンを抱えて通ったあの道
秋の日の図書館の　ノートとインクのにおい
枯葉の散る窓辺　学生時代

2．賛美歌をうたいながら　清い死を夢みた
何のよそおいもせずに　口数も少なく
胸の中に秘めていた　恋へのあこがれは
いつもはかなくやぶれて一人書いた日記
本棚に目をやれば　あのころ読んだ小説
過ぎし日よわたしの　学生時代

3．ローソクの灯に輝く　十字架をみつめて
白い指をくみながら　うつむいていた友
その美しい横顔　姉のように慕い
いつまでも変らずにと　願った幸せ
テニスコート　キャンプファイヤー
なつかしい日々は帰らず
すばらしいあのころ　学生時代

白いブランコ

1）君はおぼえているかしら
あの白いブランコ
風に吹かれて二人でゆれた
あの白いブランコ
日暮はいつも淋しいと
小さな肩をふるわせた
君にくちづけした時に
優しくゆれた　白い白いブランコ

2）君はおぼえているかしら
あの白いブランコ
寒い夜によりそってゆれた
あの白いブランコ
誰でもみんなひとりぼっち
誰かを愛していたいのと
つめたいほほをよせたときに
静かにゆれた　白い白いブランコ

この広い野原いっぱい

1）この広い野原いっぱい咲く花を
ひとつ残らずあなたにあげる
赤いリボンの花束にして

2）この広い夜空いっぱい咲く星を
ひとつ残らずあなたにあげる
虹に輝くガラスにつめて

3）この広い海いっぱい咲く船を
ひとつ残らずあなたにあげる
青い帆にイニシャルつけて
（間奏）

4）この広い世界中の何もかも
ひとつ残らずあなたにあげる
だから私に手紙を書いて
手紙を書いて

小さな日記

1）小さな日記に　つづられた
小さな過去の　ことでした
私と彼との　過去でした
忘れたはずの　恋でした

2）ちょっぴりすねて　横向いて
だまったままで　いつまでも
やがては笑って　仲なおり
そんなかわいい　恋でした

3）山に初雪　降る頃に
帰らぬ人と　なった彼
二度と笑わぬ　彼の顔
二度と聞こえぬ　彼の声

4）小さな日記に　つづられた
小さな過去の　ことでした
二度と帰らぬ　恋でした
忘れたはずの　恋でした

四季の歌

1. 春を愛する人は　こころ清き人
スミレの花のような
ぼくの友だち

2. 夏を愛する人は　こころ強き人
岩をくだく波のような
ぼくの父親

3. 秋を愛する人は　こころ深き人
愛を語る　ハイネのような
ぼくの恋人

4. 冬を愛する人は　こころ広き人
雪をとかす　大地のような
ぼくの母親

山は心のふるさと

1. 山は山は山は　心のふるさとよ
山は山は山は　仲間のふるさとよ
雪と岩と森に　生命を燃やし
明日のために　行こう山へ行こう

2. 山は山は山は　きみらのふるさとよ
山は山は山は　みんなのふるさとよ
花と鳥と星に　親しみながら
みんなとともに　行こう山へ行こう
みんなとともに　行こう山へ行こう

青い山脈

(1) 若く明るい　歌声に
雪崩れは消える　花も咲く
青い山脈　雪割桜
空のはて
今日もわれらの　夢を呼ぶ

(2) 古い上着よ　さようなら
さみしい夢よ　さようなら
青い山脈　バラ色雲へ
あこがれの
旅の乙女に　鳥も啼く

(3) 雨に濡れてる　焼け跡の
名も無い花も　ふり仰ぐ
青い山脈　輝く峰の
懐かしさ
見れば涙が　また滲む

(4) 父も夢見た　母も見た
旅路のはての　その涯の
青い山脈　みどりの谷へ
旅を行く
若いわれらに　鐘が鳴る

今日の日はさようなら

1) いつまでも　絶えることなく　友達でいよう
明日(アス)の日を夢見て　希望の道を

2) 空を飛ぶ　鳥のように　自由に生きる
今日の日はさようなら　またあう日まで

3) 信じあう　喜びを　大切にしよう
今日の日はさようなら　またあう日まで
またあう日まで